

or the Fatherland—these transactions being committed at by the Combon, or Viceroy of the Province of Fo-kien.”

また同じ報告中に、一六二七年及一六二八年（即ち我が寛永四年及五年）に於て、蘭人が臺灣より日本へ送りし生絲の價額を擧ぐ。是等も亦臺灣が日本へ輸入の支那貨物、特に生絲の一の中繼地たりしことに關する重要な史料なり。（大正六年三月六日記す）

## 第十七世紀に於ける 英佛同盟及び英國侵 入計畫に就て

文學士 長 壽 吉

Prof. Firth, C. II. の Eng. Hist. Review に於ける多くの論文が英國革命時代研究の興味を證する

が如く政治思想の變遷以外に於ても、英國革命時代の西歐羅巴史、殊にその西歐諸國の外交の沿革は、興味ある研究題目と、なる事が出来る。英國及和蘭の交渉は、既に箕作博士の論文、殊に *Three English Invasions of the Netherlands* (Engl. niederländische Invasionsbestrebungen, Tit. 1891) に於て、最興味多き説明が、與へられてあるが、是英蘭交渉より、やゝ後れたる時代に於ける、英佛西三國の關係を稍特殊の方面に於て余は今爰に、多くは英國の方面より見たる資料に由て、説明しやうと思ふ。資料は之を、文中に挿記したるもの、外、僅に Firth, C. II. *Stuart Tracts, 1603-1693*. London, 1903 を、滯英中、參照したに過ぎない。當時の *State Papers* 以外のものに於て、(Clarendon, S. P. 等々) 是に挿記したその多くは、多分東京帝國大學に、所藏せられてあるかと思ふ。

*England's political Ideen. a). Religions-Protes-*

tantenbund b) Materielles-West-Indien.

2. Englisch-spanische u. englisch-französische Contorenzen. a) Spanische Seige-Calais. b) Französische Seige-Dunkirk.

3. Unerfolg er Streifzug. Sindercomt's Attentat.

4. Englisch-französische offensive Allianz gegen Spanien.

の順序に記するにせよ。

1

(a) Worcester役(3. IX. 1651)に於て敗れた英國王 Charles II. は、佛國に逃れ、王黨を糾合し、再舉の機會を志したが、Commonwealth は爾後一大勢力として西歐羅巴諸國間に認められ、將に當時西歐に、覇をなして居つた西班牙と、佛蘭西との間に入つて、爰に三國鼎立の形勢が、成立うとして居る。是時に當つて Commonwealth の國是或外交方針は、如何なるものであつたかと云に、彼の

三十年戰爭中期以來稍衰へた、歴史上の宗教勢力は、是時も猶連續して居るので、先づこの方から見ねばならぬ。即ち共和政府は、熱烈な清教派者である故に、恒に舊教及其習慣には反對して居つて、從て舊教を遵奉する國々には、自然に敵對する様になるのである。之は先づ、英國の Religious = politische Idee とも云得やう。(b) 又當時各國は、所謂殖民熱にかゝつて居つて、其方の先進國は富有になつて、後進國は之を真似る、葡萄牙西班牙に次で和蘭、之に次で佛國英國は、次第に殖民地を得むとし、その爲幾多慘愴極まる争闘をして居るが、英國が海軍を擴張したのも、之れが爲で、英國は何うしても殖民地を得て、國富を増進しなければならぬ必要がある。實に一六五一年の英國政府の費用は、二百七十五萬磅で、前時代の殆ど三倍に當り、爲に或は前王蒐集の美術品を賣却し、又は舊寺院を毀ちて、其材料を賣らう

なる云説も出た位であつたので (GoJwin, W. Hist. of Commonwealth in England. Vol. III, Lond. 1824, 參照) 豊富な財源を國外に得ねばならぬ云、英國の Materiel = politische Idee とも云得るものがあつた。

是の二つの *Raison d'état* を観ねばならぬのであるが、猶具體的に之を考へて見ると、(第一) 宗教的の方針としては、英國政府は、ある一つの *Protestantismus* を、作らうと云理想があつたらしい。たとへ積極的でなくとも、新敎國が舊敎國に對して、大合盟を作つたらばと云、理想があつたらしいので、<sup>1)</sup> [Cromwell's Speech. XIII, (25, 1. 1658)] 之は英國が新敎諸國との和約、即ち英國と丁抹和蘭及瑞典との和約に於て、是等事實に關する記録に於て、之を察する事が出来る。

(Carlyle, T. Cromwell's Letters and Speeches. & Dunton, J. Corps Universel Diplomatique; Tome

VI, Pt. II) 殊に瑞典との交渉に於て之を察する事が出来る。<sup>2)</sup> (Carlyle-Complements-Cromwells answer to Swedih ambassador.) 是點から當時の英國政策を、觀て行かねばならぬ。(第二)に、經濟上の方針を考へて見ると、之は明に記録に残つて居る。即ち一六五三年の英國和蘭二國交渉に於て、(Prof. Mitsukurii, G-Englisch-Niederländische Unions' strebungen. Tüb. 1891.) 英國の申出に「亞細亞に於ける商業は和蘭政府に單獨に且私に委せらる可きこと。英國東印度商會は或賠償を得て、其の總ての職權を、和蘭に渡す可き事。之等の代りにブラジルを除きたる、南北亞米利加は、英國の通商專權に屬す可き事。且其爲必要なる港灣島嶼の占領を、遂行する助力として、和蘭は二五隻の軍艦を派出する事。又ブラジルは二國にて分割する事。」なる (GoJwin, & Gardiner, S. R-Hist. of Commonwealth a d Protoclorate. Vol.

I. Lond. 1903)之を以て見れば、英國の通商殖民の目的地は、西印度であつたので、之點からも英國政策を以て行かねばならぬ。要之、英國共和政府の外交方針には、新教國大合盟と云ふ理想の指針と西印度發展と云指針とが、在つたので、この觀察の規矩に照しつゝ、英國侵入計畫を間にして、立鼎した英西佛三國の、外交の経過を考へて試る事としたと思ふ。

*Ref.* (1) Look how the House of Austria on both sides of Christendom, both in Austria Proper and Spain are armed and prepared to destroy the whole Protestant Interest!

(2) I am very willing to enter into a nearer and more strict alliance, as that which, in my judgment, will tend much to the honour and commodity of both Nations and to the general advantage of the Protestant Interest, &c.

## II.

英國の經濟的外交方針の且其經濟的發達の

と云ふ點である所の、西印度に於ては、當時西班牙は度々英國民を、迫害して居つたのであつた。或時は殺害し、或時は礦山に驅つて、暴力を以て使役して居つた。又 Madrid に於ては、英公使 Ashmun が、英國王黨の亡命者の爲に、殺された事があるが、是時西班牙政府は二人の加害者中殊更にその新教徒のみを捕へ、他の舊教徒は、寺院に逃れたと云口實で、之を罰しなかつたやうな事があつた爲に、英國民の感情は、全く西班牙を嫌惡して居つたのである。然し國交上に於ては海外殖民地に基く政策から英蘭關係と佛西關係とは、英國及西國をして一六三〇年以來和蘭と佛蘭西とに當る爲に、平和關係を結ぶ様にならしたのであつて、一六五〇年には英國は合同して、佛領 Catala を占領せむことを、西國に申込んだ事があるが、西國は英海軍が同地點の占領後、英海峡を支配せむ事を恐れて、之を諾しなかつた事がある。(Ranké,

L. v. Englische Geschichte, Buch 12, Cap. 5) 又之に對して佛國は英西の親近を恐れ、Span. Netherlands の Dunkirk 共同占領を英國に申出した事があせ<sup>9</sup> (French Ambassador Croulle's letter to Mazarin, 1650 = Gardiner-Vol. I, Chap. XIII.) (French Envoy Gentilot at London, 1651 = Cheruel, A.-Hist. de France sous le Ministère de Mazarin, Tome II. Par 1882) 英國は喜んで同意し、IV. 1652. 五千の兵を Dover に集めたが、大陸に英國の立脚地を得る事は、佛國にとりて恐る可きことであるから、Mazarin は躊躇して、終に事實とならなかつた。(Lord Clarendon, E. H.-Hist. of the Rebellion. Vol. VII, Book XIII, Oxf. 1888)

勢力は何れの國にも敵として恐る可く、味方として頼る可きが明である。果して、VII. 1654. 二國は更に英國に向つて、同時に攻撃同盟を申込むたのであつた。(a) 先づ英西の交渉を逃げて見ると、西國は Calais の共同攻略を Mazarin 反對黨の助力を申込むだが、之に對して英國は、(一)には西印度の件を申出し、西國が、一六三〇年以來英國民の受けた損害に對し、相當賠償をなし、("Satisfaction for the blood") 同地方に於ける、英國商賣の自由通商を許す事を求め、("Liberty of conscience for your people who trade thither") (二)には宗教裁判の件を申出し、西印度に於て英國商賣は、新敎聖典を衣囊にして全く束縛せられぬ事を求めて居る。["We de fired such a liberty as that they might keep their Bibles in their pockets, to exercise their liberty of religion for thmelves."] (Carlyle Speech. V)]

[Edwards, B.-Hist. of the West Indies. Book II, Chap. I. Lond. 1907.]然し之は到底、西國の同意を得ぬ所である。Rankeは之が殆西國民にとりては、侮辱に等しい申出である、と書いて居るが、<sup>a)</sup>(Ranke-Buch XII, Kap. 5)果して西班牙は、面白く拒絶をして、乃ちこの要求を以て西國の兩眼を要求するに等しいとして居るのである。<sup>b)</sup>(Edwards-ditto & Carlyle-Speech V.)かくの如く到底二國の主義と利權とは一致しない。既に英國艦隊の強大なる二隊は、同年クリスマスの翌日、Paris mouth軍港を出發し、一は地中海へ、一は西印度へ各々西國征伐の途に上つたのである。<sup>c)</sup>次に又英佛の交渉を見ると、佛國は Dunkirk 共同攻略及占領後之を英領とする事、及西印度征伐に、多量の補助金を出すことを申出で、之を好餌として兎に角、佛國の孤立を救ひ、國內不平派の策源を絶ち、西國を苦しめむとし、先づ英佛の平和締結

を主張して居る。(Chéruel-Tome II)英國は佛國の力をかりて、西國が Peru 及 Potosi から持來る、多量の金塊を得て、國富を致し度いから、之の申出には傾耳した。<sup>d)</sup>[Cunningham, W.-Growth of Eng. Industry and Commerce. Book VII.]を以て兎に角、平和條約を結ぶこととし、Dunkirk 一件は爾後の交渉とし、先づ佛國にある英王及王黨、其他亡命者を、佛國が國外に放逐する事を求め、その同意を得たのであるが、この交渉中に於て、遇々英國の宗教的の外交方針を、傍から證明しうる様な事件が生じたのである。即ち、英國が佛國との親和を求むるのは、佛國よりも猶舊教的な、西國に對する爲で、佛國との接近は、單に物質的の方面で、得らるゝのであるが、此間にもいかに英國が、新教徒全体の利益を計るに、熱心であつたかゝ辯るのには、是事件である。即ち當時佛國の半屬國であつた、伊太利北部の Savoy 侯國內に於て新

教徒 (Piedmontes) が迫害せられて居つたのであるが、是報知が英佛の交渉中に英國に到着し、英

が、更に他の理由は、英國侵入計畫の存した事である。

國民の同情は、終に四萬磅の義捐金となつたので英國は佛國に對し、是新教徒救助を要求し、佛國が Savoy に壓力を加へることを要求し、而して實に之を以て、英佛平和親近の *Sive qua non* として居る (Godwin. Vol. IV, Chap. XXXI) 佛國は之

が、更に他の理由は、英國侵入計畫の存した事である。

の要求に對し、大に困却したが、終に之を諾し、8. VIII. 1635. Pineloro 條約を以て、Savoy 侯をして新教徒を許すことを約せしめ、かくて 22. X.

(4) .... to ask a liberty from the inquisition and free sailing in the West Indies, is to ask his masters two eyes.

### III.

1635. 西國公使は London を退去し、翌日英は西に宣戰し、其又翌日、英佛親和條約 (Westminster Friede) が、成立するに至つたのである。 (Montague, F. C. Political Hist. of England, 1603-1660; Chap. XVI.-XIX.) 如斯く英國が佛國と親和し、猶その團結を固くせむとしたのは、當時英艦隊の西印度征伐の失敗の事件の促す所でもあつた

英國侵入計畫と云事は、西洋史上可なり面白い事件で、眞面目な論文、又滑稽化した説明、戯畫等甚多い。さて前述の如く、再舉を志して居る英王には、今や英西二國が交戦關係に存することは好都合である。殊に當時英島内にも内應者あり議會にも政府反對論者等の所謂 Malignant も多いのであるから、英王が之の好機會を利用せむとした

のは當然である。又一方西班牙にとりては、英國不平黨の煽動と、英王保護とは、英國を苦しむるに力ある事が明であるから、之を利用せむとする考がある。それで是事情は相結んで、終に、IV. 1656. の、英王及西國間の秘密條約となつたのである。即ち二者相結びて、所謂 Spanish Charles-Stuart Invasion を、計畫することゝなつた。之條約に由れば(一)西國は兵六千を以侵略を企つ(二)英王は亡命者を糾合したる軍を作る。(三)西國は之を輸送する船舶及軍資を出す。(四)西國は年額七千磅を英王に送る。(五)英王再即位せば葡萄牙征服に西國を助け、且英國は其占領したる西印度地方を西國に返還すと云ふ事がある。(Chrendon, Book XV.)而侵入軍は Ostend より乗船して Ireland に上陸し、同地の不平黨と合し、更に英島に攻入る計畫であつたらしい。迂回の途を選むだのも、意味がある所である。③ (Cromwell's Letter to

Henry Cromwell, Major General of the Army in Irland, Whitehall 26. Aug. 1656)然し英海軍の強大と、英政府の武斷政治とは、侵入軍の出發も、不平黨の蜂起も、ともに不可能に終らしめた。是場合にて Cromwell の暗殺に因つて起る、國內秩序の紊亂を利用することは、侵入計企者の當然思付く所であるから、暗殺計畫は度々行はれたのである。

既に夙く V. 1656, Gerard と云者の、暗殺計畫の失敗があつてから Edward Sexby (+1658) は英島と Flanders 間を往來して、度々計畫して居る。中にも Miles Sindercomb (+1657) の暗殺計畫(Sindercomb plot)が最著し(彼は 6. I. 1657. London 西郊 Hammersmith の料理店の窓から、Lord Protector の Hampton Court 通る路を、狙撃せむとして失敗し、其翌々日 Whitehall Chapel 禮拜式の夜、之に放火して、混雜中暗殺を遂げむ



らしたが捕へられ、次で Sexby も捕へられた。

に其機會を失ふ様になつたのである。

(Sexby assert in his "Killing no Murder," printed in Holland, which under the name of William Allen drew up an apology for tyrannicide, that "Had he (Sindercomf.) lived there, his name had been registered with Brutus and Cato, etc.," National Biography.)

(5) We are informed that the old enemy are forming designs to invade Irland, and that he and Spain have very great correspondence with some chief men that Nation for raising a sultan rebellion there, etc.,"

#### 四。

不平黨は Militia の増大と捕縛の頻々たる爲に、蜂起の機會なく、英王はたゞ Oxford に、廿二隻の軍船 (Galleon) を用意し、歩兵一萬騎兵一千餘を備へ、Marquis of Ormont は Second Parliament の爭論に乗せしむとしたが、英艦隊の封鎖の爲、侵入軍は出發し得ない。王は英島内の不平黨蜂起をまち、不平黨は英王軍の侵入をまつ間に、英國政府は是形勢に促され、益佛國との親和關係を強くし、攻守同盟を作る事となり、侵入軍の根據地を攻略する事となつたので、英國侵入計畫は、終

Westminster 平和以後、二國相互の形勢は、是親和の關係を一層強くする必要を生じて來た。殊に英にとりては、その國是から自然に出る對西策又對侵入計畫策共に、佛國の助力を必要とし、佛は又國內不平黨殘徒、又貴族僧侶議會の反政府黨に對し、壞家に對し、英國を味方とする、利益を認めて居るので、當時 Mazarin も英共和國の強大を豫想して居る。<sup>6)</sup> (Lectures du Cardinal Mazarin. Tome VII, 1655, VII. 157, VI. also quoted in Kitchin, G. W. Hist. of France. Vol. III. Oxi,

1844) 然し是強大國が大陸に一地點を占領することには、佛國にとり、恐る可きことであるから、Dunkirk 一件は成可く有耶無耶の間に過さんとして居る、それで元來 Mazarin は其施政外交とも恒に決定的的態度をこらぬ人であるが (Wakeham, H.O. The Ascendancy of France, 1598-1715. Chap. VI. N.Y. 1915) 是時一方英公使 M. Lockhart に向ては、是 Dunkirk 攻略が二國の名譽である、言明するかと思へば、一方に於ては、佛王 Louis XIV. の、西王女 Marie Therese の結婚を計企すると云ふ様なわけで、極く曖昧であつたが、相悪く、是攻略は英國にとりては、極必要である、又急を要する事である爲、英政府は嚇し又すかす様なわけで、終に漸く、23. III. 1657. に至て、英佛攻守同盟は成立したのである。即ち(一)聯合軍は、Gravelines, Mardyke, Dunkirk を陥るゝ事。(二)其爲佛國は二萬の兵を出し、英國は六千の兵と、是地點を充分海上より、封鎖し得る艦隊を出す事。(三)六千の英兵の經費の一半は佛國から負擔する事。(四)先づ始めに Gravelines 陥らば、Dunkirk の擔保として、英國が占據する事。(五) Mardyke, Dunkirk 占領後は英領となるが、在住の舊教徒は、保全せらるる事。等が協定してあつて、(Godwin Vol. IV. Chap. XXXI.) かくて佛は、Span. Netherland 侵略に着手し得、又國內を一致し得、英は西を討ち、侵入計畫の立脚點を、抑へる事が出来るのである。

然るに又復佛國は例の如く曖昧で、Dunkirk よりも寧その東方の St. Venant 及 Cambry がほしい、Dunkirk 占領を何うかして、さげ様として居る。然し英國は之に關せず實行し、14. V. 六千の英兵 Boulogne に上陸し、大艦体の地點封鎖も始める。佛國も致方なく聯合し、25. IX. Mardyke 陥るゝ事。(二)其爲佛國は二萬の兵を出し、英國は六千の兵と、是地點を充分海上より、封鎖し得る艦隊を出す事。(三)六千の英兵の經費の一半は佛國から負擔する事。(四)先づ始めに Gravelines 陥らば、Dunkirk の擔保として、英國が占據する事。(五) Mardyke, Dunkirk 占領後は英領となるが、在住の舊教徒は、保全せらるる事。等が協定してあつて、(Godwin Vol. IV. Chap. XXXI.) かくて佛は、Span. Netherland 侵略に着手し得、又國內を一致し得、英は西を討ち、侵入計畫の立脚點を、抑へる事が出来るのである。

英佛聯合軍は大勝し、25. VI. Dunkirk は終に占領せられたのである。彼同盟條約の第四條は、英國の佛に對する要意を、見るに足るもので、當時の佛國の態度を考ふるに、足る所のものである。聯合軍は猶 Furies, Dixmude, Ypres, Menen, Oud nurc 等を占領し、西領の一半を占領し、英佛二國同盟の目的を達し得たのであるが、3. IX. 1658. Cromwell は逝去し、共和政府は間もなく倒れる、又西國は佛國と Pyrenées 條約を結ぶに至りて、(7. XI. 1659) 國際の形勢は全く變遷し、英佛同盟は自然に消滅したることとなつたのである。是等の交渉に於て、Cromwell の性急な熱烈な性格と Mazaria の巧妙な捕捉に難い様な性格とは、能く表はれて居つて、二國の至らんとする希望も見て居るのである。思ふに實に當時の英國の政策は、第一節に述べたやうな Ideen に導かれて居つたものである事は、是事件を通じて見ることが出来る。

來、且 1651 頃より 1659 頃に至る、十年間の三國鼎立の西歐は其間に侵入計畫を挟むで、當時の徹底的な英國政策に由て、支配せられて居ることを認め得るのである。〔Cromwell's letters to Sir William Lockhart. (21. Aug. 1657) & (31. Aug. 1657) and to General Montague, on board the *Nasby*; in the *Duvas*, (11. Aug. 1657)〕 (大正五年二月史學研究會講演梗概)

*Kzf.* (6) "La république anglaise s'établissant, seroit une puissance à redouter pour tous ses voisins, puis que, sans exagération, cette puissance seroit cent fois plus considérable que n'étoit celle des rois d'Angleterre, etc."

### 考證學者としての伴信友翁(上)

文學士 阪倉篤太郎

#### 一 緒言

平田篤胤、香川景樹、橘守部と合せて天保四大家と數へられ、類書の高田與清、神學の平田篤胤